

第1章 どん底に立つて

一九七五年に世界は終末を迎えようとしていた。エホバの証人はハルマゲドンを予言し、大変動の
きざしもそこら中であつた。北ベトナム軍はサイゴンから米兵を一人残らず追っ払い、インディラ・
ガンジーはインドで市民の自由を停止し、IRA暫定派はロンドン・ヒルトンを爆破した。アメリカ
ではウエザーマンの過激派メンバーが銀行や企業や国務省を爆破していた。元検察長官やホワイトハ
ウスの高官数名が監獄送りとなつた。たった一七日の間にジェラルド・フォード大統領の暗殺未遂事
件が二回も起き、そのひとつはチャールズ・マンソンの信奉者によるものだった。ほとんどのアメリ
カ人がキングと認める唯一の存在であるエルヴィス・プレスリーは自滅への道を邁進していた。そし
て無責任な若者たちは、そんな世界の終わりの到来や、キングや世界の指導者の失墜などはまったく
無視して、ポリエステルのデイスコ装束で、KC&ザ・サンシャインバンドの「ゲット・ダウン・
トゥナイト」にあわせて扇情的なステップを踏んでいた。

私はそうしたカオスとはほとんど無縁の生活を送っていた。この記念碑的な一年の大部分を、図書室か心理学研究室にこもって過ごしていたからだ。だが、のんきに口笛を吹く映画の登場人物に頭の五つある宇宙人が背後から忍び寄るように、目に見えない不気味な力は私にも迫りつつあった。

当時の心理学は、他の社会科学といっしょに革命を迎えようとしていた——根底をなす前提を爆破し、その影響下から逃れようとしていたのだ。実際、現実世界のほうは一九七五年を結局なんとか切り抜けたのだが、伝統的な社会科学の概念世界はそうはいかなかった。そして私は、自分でも知らないうちに、過激な科学反乱軍に身を投じようとしていた。

二人の教祖——ジェーン・ランカスターとE・O・ウィルソン

その運命がやってきたのは、大学院の修了試験が行われる数日前のことだった。試験では、学識豊かな試験官たちに、社会心理学における実際の研究と理論について百科全書的な知識を披露するよう要求されることになっていた。だから本来であれば私は、レオン・フェスティンガーの認知的不協和理論やフリッツ・ハイダーのバランス理論、クルト・レヴィンの集団力学理論などを検証する古典的な実験の成果をまじめに勉強しているはずだった。だが目先の仕事如山積みになっているときに限って、まったく関係ないものに急に食指が動いてしまう。自らの首を絞めるこの性格のおかげで、私は大学の書籍部にふらふらと足を向け、本を漁りはじめた。そこで目についたのが『霊長類の行動と人

1 どん底に立って

間文化の出現』という本だった。著者はジェーン・ランカスターという霊長類学者。実におあつらえむきに、実験社会心理学とは関係なさそうに思えたので、研究からの逃避モードに入っていた私は是非ともそれを買って帰り、早速午後にも読まねば、という気分になった。

私が期待していたとおり、ランカスターの本は、修了試験で社会心理学の教授たちが尋ねることになる質問とはほとんど無縁だった。でも、その教授たちが尋ねるべきだった質問とは全面的に関係があった。社会心理学という分野は、当時もいまも、私たちが日々頭を悩ませている多くの事柄、たとえば恋愛、攻撃性、偏見、信条、権威への服従などを扱っている。だが取り扱う主題は広範であつても、理論的な広がりとは当時はいささか狭いものだった。

アリゾナ州立大学の大学院に入ったばかりのとき、二人の教授がそれぞれ別の機会に、社会心理学とは「ミニ理論」なのだと言張って私に告げたものだ。そしてたしかに、この分野のテキストを読んでみると、相互の関連性がないミニ理論が無秩序に散在していることがわかった。それぞれのミニ理論は、社会行動のごく一部だけを説明するようにつくられている。たとえば、あるミニ理論はフラストレーションから生じる攻撃を扱い、別のミニ理論は似たような考え方もつ人々が互いに抱く好意を扱う。また別のものは、一方的な議論と双方に理のある議論とで反応がどう変わってくるかを説明しようとする。この手の理論は他にも無数にあつたが、そのほとんどに見られる最大の特徴とは、相互のつながりがまったくないということだった。

当時の社会心理学者たちは、理論的な制約だけでなく、実証的な偏狭ぶりも誇りに思っていた。言

い換えれば、彼らは拒食症の人のように思考と行動を薄くスライスして、そればかりを研究していたのだ。他の実験指向の心理学者たちと同じく、一九七五年当時の社会心理学者たちも、人間の「性向」を行動の原因として研究するのを意識的に避け、むしろ現在進行中の思考や行動が、直接の状況の変化に対してどう反応するかという問題に専念していた。しかも、ここでいう「状況」とは、三分以内（心理学実験の一般的な実施期間）で捉えられるものに限られていた。

社会心理学に見られるこうした制約には理由があった——実験に基づく研究はコントロールできないものを極力減らすように設計されており、理論に制約を設けることで、頭や身体の内部で起きている観察不能な事象についての行きすぎた憶測を抑えられると考えていたのだ。だが人間行動の源流に興味をもっている好奇心旺盛な若い学生にとって、こうした制約は、暗い横丁で鍵をなくしたのに、明るいからといって街灯の下でそれをさがし回っている酔っ払いの不合理な衝動のように思えた。

こんな状況だったので、ランカスターの本を読んで理論に対するきわめて広い視点に触れるのは、私にとってほとんど後ろめたいような喜びだった。カトリックの学校でエロ雑誌をたまたま見つけたときに感じたものの学術版とでも言おうか——先生たちは、私がこんなものを見ていたらたぶん顔をしかめるだろうが、どうしても目が吸いつけられてしまうというわけ。ランカスターの進化的な視点は、特定の文化における社会的行動のごく限られた一面が、研究室という非常に限定的で人為的な状況でどう変わるかといった狭い関心のかわりに、心理学、生物学、人類学の境界線を消して、こうした広範な問題がどのように組み合わさるのかを考えるべきだという魅力的な提案をするものだった。

1 どん底に立って

このアプローチがもつ深遠な意味に酔いしれた私は、誰彼かまわずランカスターの本を絶賛するようになった。大学院の同級生や指導教官たちは困ったような笑みを浮かべた。カルトに入った理由を一心に説明されているかのような表情だ。でも新任助教授のエド・サダラは、訳知り顔でうなずいた。サダラはランカスターの本は読んでいなかったが、『社会生物学』という別の本を手にしていた。彼によれば、ハーバード大学の昆虫学者E・O・ウィルソンが書いたこの『社会生物学』こそは、アリアライオンなど人間以外の動物の行動ばかりを扱ってはいても、人間行動に適用できるかもしれない仮説の宝庫ではないか、というのだった。

当時のサダラには、社会的優位性に関して検証してみたいと思っっている仮説があった。チャールズ・ダーウィンが性淘汰と呼んだプロセスでは、多くの動物種で、メスは交配する相手を慎重に選ぶが、オスのほうはそれほど選択的ではないとされている。これはつまり、多くの場合に、メスは社会的にも優位なオスを選ぶということだ。サダラは、人間の女性に対して示す関心も、同じように社会的優位性に影響されるかどうかを検証したいと思っていた。このアイデアについては後で詳しく見るが、ここではたんに、サダラと私、そしてベス・ヴァーシユアがいくつかの研究を行った結果、新生カルトの教祖であるうがなかるうが、霊長類学者ジェーン・ランカスターと昆虫学者E・O・ウィルソンはポイントをついていること、そしてそのポイントが人間心理に対して有用な意味合いをもっていることが示唆されたことと述べておくにとどめよう。

だが、こうした主張に誰もが賛同してくれただけではない。優位性と魅力に関する私たちの研究結

果は明快で信頼できるものだったが、論文として刊行してもらえないまでには一〇年以上の月日がかかってしまった。当時はまだあずかり知らぬことながら、「政治的正しさ」を標榜する警備隊たちが、毛沢東の文化大革命の紅衛兵とオーウェルの『一九八四年』の反セックス連盟を合わせたほどの熱意をもって、今にも学界を席卷するところだったのだ。サドラとヴァーシユアと私は、動物で明らかにされた進化的な概念を人間に適用しただけのつもりだったのだが、その結果を発表しようとしたら、自分たちがしているのは実は思想犯罪だと知らされたわけだ。最初に投稿した論文に対して批判的だった査読者に言わせると、「フェミニニストにして学者である私としては、この種の本質的に性差別的な思考から、何も知らない本誌の読者たちを保護するのが自分に課せられた使命であると感じる」——つまり、私たちの研究結果はあまりに危険すぎて、他の研究者の目に触れさせることさえならぬというのだ！ いやはや、私が読んでいたのはまさに知的なポルノだったようで、かつてカトリック校でシスターのキャサリン・メアリーにポルノが見つかってしまったのと同じことが起きていたらしい。

社会生物学をめぐる学術的な騒動——E・O・ウィルソンに対する熾烈な攻撃がその典型だった——は、いまや学术界のゴシップとしてはかなり旧聞に属する。だが、若き研究者として騒動を実際に体験した私にとってみれば、それはきわめて個人的な戦いであり、また現代科学の相貌を一変させるようなアイデアの競争に自分を引きずり込むものでもあった。学術論争が最終的に啓発につながることも多かった——批判は新しい研究を奨励するからだ。面白いことも多かった（ときには、そうと

1 どん底に立って

認めるのに気がとがめることもあった)。進化心理学の反対者たちは、有名大学の立派な教授たちも含め、私たちの考えを否定するときに実に傲慢なことが多かったので、実際のデータによって彼らのほうが間違っていることが示されると、こっちの株がいつも以上にぐっと上がったのだ。

振り返ってみると、一九七五年は伝統的な社会科学にとっても終末ではなかったのかもしれない。過去三五年に起こったことを受け入れまいとする頑固者たちは今なお残っているからだ。でも、それは間違いなくダーウィン再降臨の年ではあった。そしてその余波はいまだに広がり続けている。

真面目が肝心？

オスカー・ワイルドは、進化心理学なんていう言葉を聞いたこともなかっただろうが、この分野を表す完璧なスローガンを書き残している——私たちはみんなどん底にいるが、そのうちのある者たちは星を見上げている、というものだ。進化心理学者がしばしば真面目な学者たちの機嫌を損ねるのも、一部には、どん底を歩き回って下世話な話ばかりを嗅ぎ回るクセが私たちにあるからだろう。かくいう私も、数年前に同僚のデヴィッド・ファンダーに殺人妄想の研究をしているんだと話して、ギョッとされたことがある。ファンダーの見立てでは、進化心理学者の手口とは次のようなものだ——礼儀正しい会話では普通避けられるようなテーマを選び、それに光を当てること。考えてみると、これはなかなか言い得て妙だ。でも、そういうテーマを選ぶのは別にそれがゴシップ誌でとりあげられるか

らではない。私たちがろくでもないテーマ（もちろん、お上品なものもあるが）を研究するのは、たとえば、誰が誰と寝ているか、誰が自分を裏切るか、誰がうちの子供を傷つけるかといった問題のうちに、それが世界中の人々が関心をもっている事柄だからである。

だいたいどうしてこれほど多くの人が『ビーブル』、『アス』などのゴシップ誌やスポーツ紙を読むのだろうか？ 『ニューヨーク・タイムズ』より優れた書評欄があるからだろうか？ それとも、どの権力者がどのハリウッドの清純派女優と浮気をしているかがわかるからだろうか？ そしてなぜ世界中の人々は苦勞して稼いだお金を毎年何十億ドルも払い、長い時間並んでまで、『風と共に去りぬ』、『タイタニック』、『ブレイブハート』、『アバター』みたいな映画を見ようとするのだろうか？ あえて推測するならば、それは映画表現が見事だからではなく、悪玉（彼ら）と善玉（私たち）の生々しい争いや、若い乙女と恋に落ちる勇敢で英雄的な男性といった、私たちが昔からゴシップのネタにしてきたような話が描かれているからではないか。

とはいえ、こうした人目を引くネタばかりがこの分野の関心ではない。進化心理学者たちは、社会科学の諸分野をお隣の生物科学と統一するような、統合的なパラダイムもさがしているのだ。実際、保守的な学者たちが苛立っているのは、この分野が一見すると大風呂敷を広げているように見えるせいでもあるだろう——進化論的な視点で心理学、経済学、政治科学、生物学、人類学を統合できると主張するだけでなく、法学、医学、ビジネス、教育といった応用分野にも大きな影響を与えられるとまで言い張っているからだ。私たちはさらに話を広げ、こうしたテーマは、学者にとってだけでなく、

1 どん底に立って

万人にとって大きな意味をもっていると主張する。ウイスコンシン州の田舎にいる親戚から、国連安全保障理事会のメンバーたちまで、みんなにとって意味があるのだ。家庭内暴力の根絶から人口過剰や国際紛争の解決まで、世界をもっとよい場所にしたいと望むならば、経済学者、教育者、政治指導者たちには、人々にこうあつてほしいという夢物語をもとに方針を決めるのではなく、人々は実際にこうなっているという、しっかりと理解に基づいて方針を立ててもらわなければならない。

第2章からの数章では、単純で利己的なバイアスについて私たちが行ってきた研究をとりあげる。性的な魅力、暴力、偏見といったものがテーマで、たとえば、次のような疑問について考えてみる。どうして高齢の男性はずっと年下の女性に惹かれるのか？ なぜ高齢の女性も同じように若い男性に惹かれたりしないのか？ どうして女性は、地位の高い男性を見ると、その男性の外見がどうであれパートナーへの献身度を下げ、どうして男性は、美女を見ると、その女性の社会的な地位がどうであれパートナーに対する献身度を下げのだろうか？ なぜ義父に育てられた人は、実父に育てられた人に比べて、父親を殺す妄想を抱く確率が高いのだろうか？ また本書の後半では、単純で利己的なバイアスに関する研究が、実は経済、宗教、社会に関するずっと大きな疑問とつながっていることも説明しよう。

疑問はまだある。原理主義的な信仰というのは、実はパートナーさがしの戦略のひとつではなからうか？ クジャクが尾を広げる理由を理解することで、人々がボルシエを買う理由がもつとわかるようになるのはなぜだろう？ 当たり前前の結果もあれば、ショッキングな結末もあるが、私たちの研究

の目的はいったって、現代で最も重要な問題に答えを見つかることだった。つまり、何が人間を動かすのか、という問題に答えようとしてきたのだ。そこで最後の数章では、ここまで見てきたバイアスが、ある水準では利己的で不合理なものであっても、別の水準ではきわめて合理的だということを説明する。また、個々人の利己的な頭の中にある単純なバイアスが組み合わさることで、社会において複雑だが秩序のあるパターンが生まれる様子も説明する。そして最後には、こうした単純で利己的なバイアスを理解すれば、もっと他人を思いやり、結びつきをもった人生を送るためのヒントも得られることを検討するつもりだ。

ですがまず、どん底からはじめよう。美しいものに対するきわめて自然な愛情が、驚くような形で人々を惨めにしてしまうことがあるという話だ。